

危機一髪事例から考える余裕避難の重要性－2017年九州北部豪雨時の朝倉市平榎集落における住民の避難行動－

近藤誠司¹

Reconsideration of Evacuation with More Safety Margin from a Case Study of a Crisis Situation Where Everyone Survived Coincidentally: Evacuation Behavior of Residents in Hiraenoki Settlement, Asakura City during the 2017 Northern Kyushu Heavy Rain

Seiji KONDO¹

Abstract

There are not many studies on evacuation behavior during heavy rainfall disasters from the perspective of examining the evacuation behavior of the entire population of a community and learning lessons from not only cases of casualties but also cases of crisis situations. Therefore, in this study, we conducted a detailed investigation of the case of Hiraenoki Settlement in Asakura City, Fukuoka Prefecture, where all the residents survived the 2017 Northern Kyushu Heavy Rain Disaster, despite suffering severe damage. As a result, we found that many residents were facing a critical situation and only survived by chance, and that measures to encourage evacuation with a greater margin of safety are needed.

キーワード：避難行動，危機一髪，2017年九州北部豪雨，偶有性，余裕避難

Key words: Evacuation Behavior, Crisis Situation, the 2017 Northern Kyushu Heavy Rain, Contingency, Evacuation with More Safety Margin

1. はじめに

2017年7月九州北部豪雨では、対馬海峡付近に停滞した梅雨前線に向かって暖かく非常に湿った空気が流れ込んだ影響等により、いわゆる「線状降水帯」が形成・維持され、同じ場所に猛烈な雨を継続して降らせたことから、九州北部地方で記

録的な大雨となった¹⁾。7月5日から6日までの総降水量は多いところで500 mmを超え、福岡県朝倉市や大分県日田市等では24時間降水量の値が観測史上1位の値を更新するなどした¹⁾。

気象庁は、この大雨について、島根県、福岡県及び大分県に、それぞれ7月5日5時55分、17時

¹ 関西大学社会安全学部
Faculty of Societal Safety Sciences, Kansai University

本報告に対する討議は2022年8月末日まで受け付ける。

51分及び19時55分に特別警報を発表し、最大限の警戒を呼び掛けていた²⁾。また、記録的短時間大雨情報や土砂災害警戒情報なども各地で相次いで発出されていたが、結果として甚大な被害を招くことになった。

福岡県内では朝倉市と東峰村に被害が集中した。福岡県が作成した報告書³⁾によれば、死者・行方不明者39名という人的被害のほか、全壊・半壊・一部損壊1,000件以上、床上・床下浸水600件以上に及ぶ建物被害が発生したという。また、道路が多くの箇所寸断され、ピーク時には20か所で、総計1,016名が孤立を余儀なくされ、最大避難者数は725世帯、2,303名にのぼった。

ところで、こうした災害の経験をふまえて「教訓」を抽出し継承していくためには、ひとつは自然の側の要因を探索するアプローチがあり、もうひとつは人間・社会の側の要因を探索するアプローチがある。そして、それぞれから見出された課題を虚心坦懐にクロスして検討する必要がある⁴⁾。後者（人間・社会）のアプローチとして代表的な研究としては、たとえば牛山⁵⁾の一連の「豪雨災害時の人的被害に関する研究」をあげることができる。

牛山は、過去の災害に関する“死者のデータベース”を作成して、犠牲者が命を落とすことになった要因分析を実施している。2004～2014年の42事例、712人を対象とした分析⁶⁾によれば、たとえば、一人暮らしの高齢者に被害が集中しているといった傾向は認められないことや、犠牲者の発生が夜間に集中しているという傾向も認められないこと、どちらかと言えば緊急性の低い防災行動中に遭難していること―牛山（2015）⁷⁾の言葉をそのまま再掲すれば、「豪雨災害時には避難が最善の行動とは限らない」こと―などを指摘している。

このような先行研究の成果を充実化させていくために、本研究ではもうひとつ新たな視点を加えることを試みる。それは、危機一髪の事例（危険に遭遇しながらも無事に生存したケース）の分析である。犠牲者の発生という帰結は、確かに圧倒的に重要な意義を有している。しかし、牛山自身も陰に陽に示唆しているとおり、災害対応の領域

においては、「Aという局面では絶対に命を落とす」とか、「Bという条件があれば絶対に助かる」といったクリアカットな教訓（一意命題）を指し示すことは難しい。人間や社会の側の要因には、多分に「偶有性」（contingency）が含まれているからである。このとき、危機一髪で助かった事例というものは、いわば境界事例に該当しており、多くの示唆を与えてくれる。命を落とす／落とさないの二値の間には大きなグレイゾーンがあること、危機には時間的にも空間的にもグラデーションがあることをあらためて対自化してくれるからである。

なお、この観点は、「豪雨防災研究のFACPモデル」（矢守、2020）⁸⁾にあてはめると、「C＝クリティカル」のカテゴリーに該当しているものと考えられる。そしてこれは、矢守（2021）⁹⁾においても慎重に指摘されているとおり、いわゆる成功事例分析などではなく、「偶発的な要素の介在」（p.11）に注視すべきケース・スタディとして位置づけておく必要がある。

そこで本稿では、上述した問題意識をふまえて、2017年九州北部豪雨で危機に見舞われながらも全員が助かった集落の事例を分析し、実践的な提言―「余裕避難」の提起―を行うことにした。

2. 福岡県朝倉市平榎集落の住民初動調査

前章で述べたとおり、2017年九州北部豪雨災害で甚大な被害を受けた福岡県朝倉市内にあっても、住民が全員助かった集落もあった。住家が流失するなどの被害を受けているため、これをもって“無事”と語ることは適当ではないかもしれないが、本稿では人命が守られたか否かに焦点をあてるため、被災地で何度も耳にした“よくぞご無事で”というフレーズを援用して、「全員無事集落」と名付けておく。そしてこの「全員無事集落」の生存者たちの中には、危機一髪事例として数えることができる稀有な体験を持っている人が多数含まれている可能性がある。

本研究が選定した調査対象地区は、福岡県朝倉市の南東部に位置する、山間部にある平榎集落である（図1、写真1、写真2）。被災直後のNHK

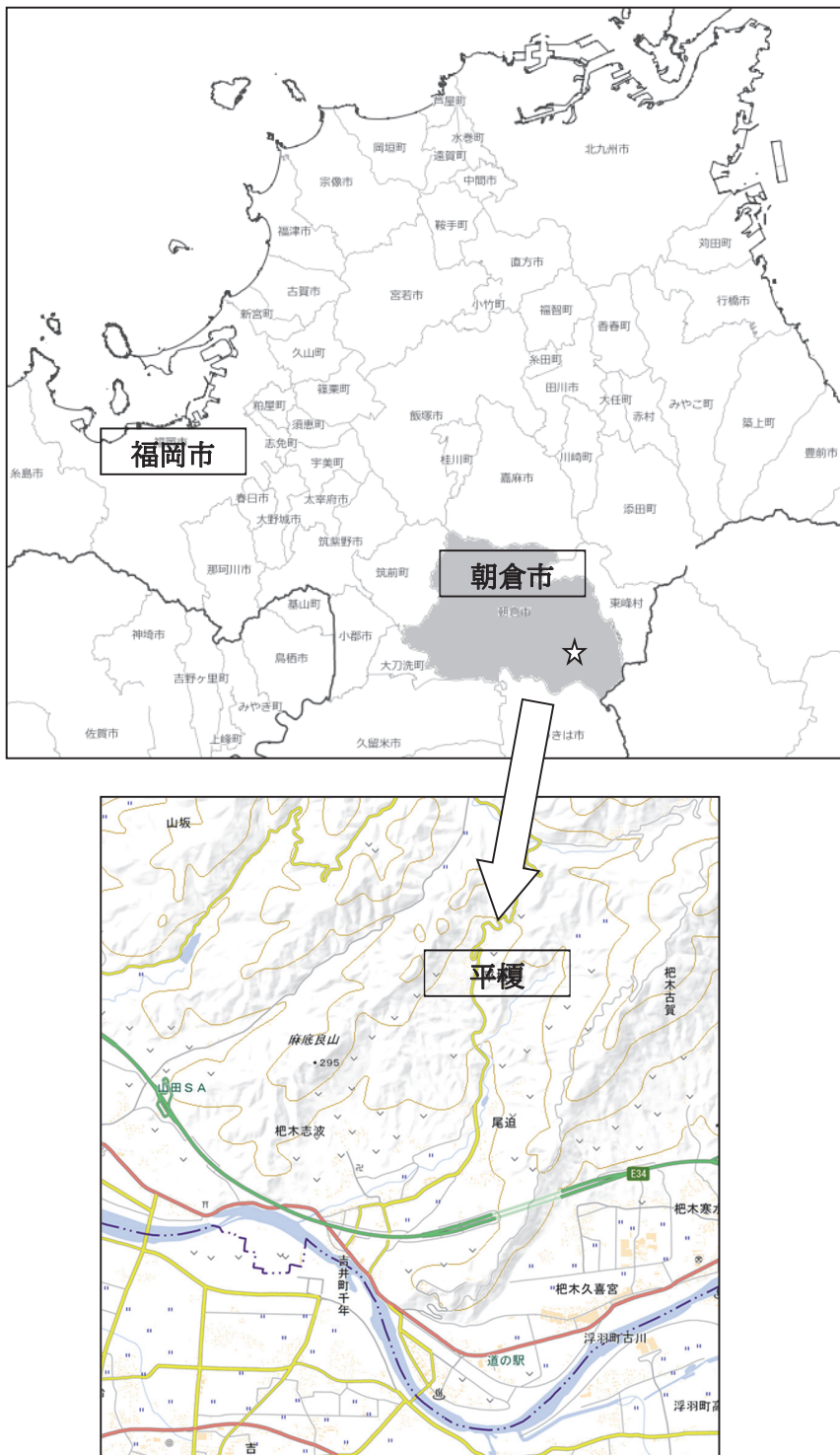


図1 朝倉市平櫓集落の位置 (国土地理院地図より作成)



写真1, 写真2 被災した朝倉市平榎集落内の様子 (2018.4.30. 筆者撮影)

の全国ニュース^{10,11)}などでも「全員が無事に避難」できた好例として紹介されていた。当該集落の初動の状況－ただし、あくまでも概況－が端的に理解できるため、ニュースの内容を抜粋して以下に記しておく。

「37世帯92人が住む朝倉市平榎地区は、今月5日の豪雨で地区を流れる複数の川の水があふれ、複数の住宅が流されたり、床上まで浸水したりして大きな被害が出ましたが住民は全員無事でした。

全員が無事に避難できた大きな理由は、5年前の九州北部豪雨での経験だったといいます。住民たちによりますと、5年前の豪雨で平榎地区では小さな川のそばにある住宅が1棟床上まで水に浸かる被害が出ました。それ以来、住民の間では、この小さな川の水量と浸水被害が出た住宅の状況が避難をする際の1つの判断基準になったということです(略)」

このようなニュース報道は、人々の記憶が風化する前に情報を保存(活写)しているという点において、初動の実態を把握するうえで重要な手掛かりを与えてくれる。しかし、カメラの前でインタビューに答えたのは集落の代表者ひとりだけであって、その情報をもとに「全員」の状況を知ることには困難である。

ニュースの本文中でも示されているとおり、当

時の集落の人口は100名近くであった。全壊9軒(3軒は流失)、土砂が流入した家も6軒あったという。そしてこの集落には、確かに2012年九州北部豪雨の経験があったのだが、その後ずっと、“訓練なし、マニュアルなし”(住民の証言)の状況が続いていた。そうであるならば、過去の経験－この文脈で言えば「教訓」－の保持のされかたに関しては、個々人で大きな差があったはずである。避難するための判断基準を事前に持ち得ていたのかという点に関しても、慎重に見ていく必要がある。

2017年に起きた豪雨災害時に人々がどのように動いたのか、その全体状況をとらめるためには、より丹念に多数の住民を対象として聞き取り調査を行う必要がある。そこで本研究では、報道機関からインタビューを受けた集落の代表者以外にも、避難誘導にあたった人や単なる追従者(フォロワー)となっていた人たちを対象として、なるべく網羅的に初動の状況を捕捉し直すことにした。

調査は、2018年の春に開始した。しかし、同年夏には2018年7月豪雨(西日本豪雨)が発生したことから作業をいったん中断し、その後、2018年末まで断続的に聞き取り調査を実施した。集落への訪問回数は、合計4回となった。1人あたりのインタビュー時間は、1時間から2時間程度に及び、ときにグループインタビューの方法を採用して、相互の記憶のギャップを埋めてもらうようにした(写真3)。

発災当時、集落内で暮らしていた実人数は、聞



写真3 聞き取り調査の様子 (2018.5.28. 筆者撮影)

表1 聞き取り調査の概要

訪問日	聞き取り対象者数	行動確認できた人数**
2018. 4.30.	1	1
2018. 5.28.	2*	19
2018. 9.28.	5*	29
2018.11.19.	5*	8

* このうち1名は、調査をアレンジしてくださった同一人物である。

** 聞き取り対象者の情報によって行動が確認できた人の数には、新規の聞き取り対象者の数も含まれている。二度目の調査以降、新たに確認できた人数を示しており、この列の数値に重複はない。

き取り調査のデータをもとに割り出すと、37世帯85名であったものと見積もられる(NHKのニュース報道とは若干異なる)。このうち、50名ほどの初動の状況を把握することができた(表1)。

次章で、人々の初動の状況をパターン分けして概括する。

3. 調査結果：人々の対応行動のパターン分析

山間にある平榎集落の住民の状況は、大きく5つのグループに分類できることがわかった。

参考として、7月5日に発出された情報の動向

表2 朝倉市の7月5日に発出された情報等の動向(福岡県の報告書をもとに抜粋・作成)³⁾

9:32	大雨・洪水注意報
13:14	大雨・洪水警報
13:28	記録的短時間大雨情報
13:50	記録的短時間大雨情報
14:10	土砂災害警戒情報
14:15	避難準備・高齢者等避難開始
14:26	避難勧告
15:12	記録的短時間大雨情報
15:30	避難指示(緊急) (三奈木・金川・福田・蜷城・立石)
16:20	避難指示(緊急)(松末)
16:36	記録的短時間大雨情報
17:25	避難指示(緊急)(志波)*
17:50	記録的短時間大雨情報
17:51	大雨特別警報
18:07	避難指示(緊急)(甘木・馬田)
19:07	記録的短時間大雨情報
19:10	避難指示(緊急)(市内全域)

* 平榎集落が該当する

を表2に掲げておく。このような情報環境の中で、人々は多様な対応行動を見せていた(表3)。

3.1 グループ1：発災時には集落にいなかった人たち

7月5日の昼間、仕事や入院などの理由で集落内にいなかった人は、集落の人口の半数近くを占めていた。

このグループに含まれる人の中には、危機が迫る中で職場や病院に留まっていた人も多く、いわゆる「居ながら避難」や「分散避難」をした状況にあった。また、集落から3km以上離れた小学校に開設された避難所を目指した人や、別の目的地(親戚の家などの避難先・逗留先)を目指した人もいた。

表3 平榎集落の避難行動パターン(聞き取り調査のまとめ)

グループ	避難行動の状況	該当者数
1	集落外に滞在	約30名と推定
2	帰宅途中で車内に取り残された	1名(最終的にグループ4に合流)
3	自宅に留まった	約10名
4	公民館に身を寄せた	約30名(名簿なし)
5	上流部で段階的に避難をした	11名(最終的にグループ4に合流)

(総数85名)

3.2 グループ2：集落外から集落（自宅）に戻ろうとして閉塞した道路上で取り残された人

もともとはグループ1に含まれていたのだが、集落を目指して車で移動した人たちがいた。その実人数は把握しきれていない。無事に（早めに）自宅にたどりついた人も多数いたようである。しかし、なかには道路閉塞によって車の中で立ち往生した人がいた。

A氏は、市街地から平榎集落の自宅付近まで車で移動してきたところ、すでに豪雨によって道路が土砂で埋まっており、もはや前に進むことができなくなった。そこで車をバックして、来た道に戻ろうかと考えたところ、今度は背後の崖が崩れてきて車は後退することもできなくなり、立ち往生してしまった。そのまま車の中で一夜を過ごすことになり、朝になってから自力で崩れた斜面をよじのぼり、崖伝いに徒歩で移動して、集落の中央にある公民館（写真4）まで移動したという。

本人の証言によれば、今から振り返って考えてみると、車ごと土砂に流されなかったのは『幸運としか言いようがなく』、また、車から脱出したあとも二次災害に巻き込まれかねないハイリスクな行動をとっていたと回顧している。A氏は『あのときはパニックになっていたので、必死に泥をかきわけながら歩いたが、今から考えると危ないことをしたと思う』と述べている。



写真4 平榎公民館（2018.4.30.筆者撮影）

3.3 グループ3：集落内の自宅に留まった人たち

このグループに該当する人たちは、少なくとも10名程度はいたものと考えられる。いわゆる「在宅避難」の典型事例である。しかし、境遇はそれぞれ人によって大きく異なっていた。

B氏は、避難することを明確に拒んで自宅に留まった。避難を断った理由を直接本人に確認することはできなかったが、避難の必要はないと判断したものと思われる。

C氏は、自宅で「垂直避難」を試みた。二階で過ごしているうちに一階に土砂が流入してきて、そのまま家から移動することができなくなった。家の躯体が持ちこたえたので大事には至らなかったが、『九死に一生を得た体験となった』と述懐している。

さらにD氏は、避難しようと荷物を家の中に取りに戻った際に、家の前に架かっていた小橋が濁流にのまれて落ちてしまい、家から避難することができなくなってしまったという。小橋を行き来していたことをふまえると、まさに、危機一髪だった。

3.4 グループ4：集落内の公民館に避難した人たち

集落内の人の動きを確かめてみると、このグループ4（集落内の公民館に滞在）は、最終的には集落全体の半数近くを占めていたようである。このなかには、自分の判断で避難してきた人たちと、避難の呼びかけに応じて自主避難した人、さらには、避難することになかなか応じず、本意ながらも連れてこられた人たちがいた。多くの人たちが、猛烈な雨に打たれてずぶ濡れになりながら移動した体験を語っている。

紙幅の都合もあるため、ここでは避難を誘導した人物たちの危機一髪事例を示しておこう。

高齢者を避難させるため、軽トラックを使って人々を搬送していたE氏は、舗装された集落内の道路にはすでに泥水が濁流となって流れ下っており、『何度もエンストした』と証言している。車ごと流されてしまう危険ささも感じていた。

また、F氏は、濁流によって電柱が倒され、そこから『バチバチと火花が散っている』瞬間を目撃したという。そのすぐ脇を、濁流に流されまいとふんばりながら通過した。その際には、『感電するかもしれない』という恐怖に襲われた。

これらのケース(E氏、F氏)は、体験者が生存しているからこそ聞くことができた話であって、本人が遭難して命を落としていた場合には、このような多様なリスクが複合的に惹起されていたことは伝えられないままになっていたはずである。

ところで、公民館に「無事」避難したことが客観的に見て果たして「無事」だったのか、多くの住民が聞き取り調査時には疑問視する証言をしていた。公民館の裏手にある斜面が豪雨によって崩れてきていたからである。場合によっては、公民館に避難してきた人たち(だけ)が土砂にのまれていた可能性がある。この点をふまえると、グループ4は、まさに全員が危機一髪事例の当事者になっていたと位置づけることができるだろう。

3.5 グループ5：避難トリガーを注視して段階的な避難行動をとった人たち(ニュースで「過去の経験を生かした」と紹介された人たち)

このグループ5こそが、過去、すなわち2012年九州北部豪雨の経験を生かして、小河川の増水を確認してから避難を行ったとして注目された人たちである。以下に少し詳しく見ておこう。なお、個人情報保護の観点から、現場見取図と微地形に関する掲載は控えることにした。

7月5日午後の段階(14時から15時頃と推定)で、集落内の小河川の水量を「確認していた」人が13名いた。実際には、激流に目を奪われていたという有様のようで、複数の該当者の証言によれば『見る見る間に増水・氾濫した』という。このとき、上流部に11名、下流部に2名が、越水した濁流によって分断されるかたちとなった。下流部側は集落内の公民館にアクセスできるため、この2名は途中で高齢者等の避難誘導も行いながら、最終的には公民館にたどりついている。

上流部に取り残されることになった11名は、こ

こから「段階的に」避難行動をとった。小河川の氾濫部からはすぐ上段にあるG宅を通過し、さらにその上段にあるH宅の敷地まで逃れ、そこでH宅の荷物を家の中から出したり土嚢を積んだりするなどの作業を手伝い始めた。G氏はこのとき、H宅よりも危機が迫っているはずの自宅に貴重品を取りに戻るなどしている。この時のことをG氏は、『実は、まだ大丈夫かなと思って、いったん財布とスマホを取りに戻ったんだけどね』と述べている。その後、最終的にG宅は、濁流によって家の躯体が丸ごと流されてしまった。

H宅にも濁流が入り始めると、11名は隣家のI宅、さらにJ宅に移動した。J宅の庭の駐車場(写真5)に身を寄せていると、雷が鳴り響き、猛烈な雨が降り続け、ついに『足元の地面からブクブクと泡が上がるほど雨水がしみ込んできた』という。この場所においては『もうダメだ』と考え、さらに10mほど上流部にあるK宅の倉庫に逃れた。

この移動の際は、足元の道路には濁った水が勢いよく流れ、木・枝や小岩も流れてきており、グループの中にいたある女性は『もはや一人の力ではふんばって歩けないぐらいだった』と証言している。さらに、近くの山の斜面では地滑りも起きていた。道路脇の擁壁などからも泥水がしぶきをあげて流れ落ち、背丈よりもはるかに高い擁壁が崩れてくるのではないかと感じたという。『坂道の左手側の斜面が崩れてくるかどうかは、そのときはもうよくわからなかった』との証言があり、



写真5 住民が身を寄せた駐車場
(2018.5.28.筆者撮影)

安全な経路で安全な場所を目指している－すなわち、段階的に避難している－というイメージだけでなく、先頭を歩いている人にさえ何ら確信が持っていなかった。

K宅の倉庫には災害時の備えがあったわけでもなく、ラジオなどの情報入手手段もなく、携帯電話も使えず、当該グループのメンバーは仕方なくこの場所で一夜をやり過ごそうと考えた。

ところが、雨が小康状態になった夜22時30分頃、当該グループは『公民館にいますであろう住民たちと、どうしても合流したいという思いがまさって』、夜明けを待たずに暗闇の中、まだ濁った水が勢いよく流れている小河川のところまで戻り、懐中電灯とロープだけをたよりに渡り、公民館まで徒歩移動した。『いま思えば確かに危なかったかもしれないが…』と述懐している。

以上が、「2012年九州北部豪雨の経験を生かして避難した」と外部から認定された人たちの行動記録である。

4. 考察と提言：余裕避難のコンセプト

2017年九州北部豪雨時における「全員無事集落」内で起きていた人々の動きを概観すると、前章で見てきたとおり、大きく5グループに分類することができた。これはもちろん、平榎集落という一事例を見た結果に過ぎないが、しかし、見田¹²⁾も指摘しているとおり、多くの平均的な事例を凡庸に見渡すよりも、ひとつの特異なケースから象徴的な、あるいは核心的な知見を抽出するほうが理論的にも実践的にも有益である場合が多い。

平榎集落の5グループのうち、実に4つのグループで、大勢が危機に直面し、その帰結は偶然によって左右されていた。グループ2のA氏は、ほんの数分の差で、もしくはほんの数mの差で、土砂にのまれていた危険性があった。グループ3の自宅滞在者は、家ごと流されていた可能性が十分にあった。グループ4の公民館避難者は、建物ごと生き埋めになっていたかもしれない。グループ5のメンバーは、雨の降り方がもうすこし激しければ、増水した小河川で足元をすくわれ、遭難していたとしてもおかしくなかった。

これらを総合して判定するならば、最も安全サイドに近い状況にあったのは、小河川を確認する行動が注目されたグループ5などではなく、明らかにグループ1、すなわち、あのとき偶然にも集落の外にいた人たちだった。このことを「たまたまラッキーだった」、「予定された行動ではない」、「集落にいなかったから関係ない」と度外視してしまうと、教訓の中心部分を見誤ることになる。平榎集落の全体像から真摯に敷衍的な教訓を導き出すとするならば、それは、土砂災害が懸念される山間集落にあっては豪雨が近づいている情報を得た際に余裕をもってハイリスクゾーンから離れてしまうことが最大の防御につながるということであろう。

危機一髪の事例は、次の災害において同じ行動をとっていれば助かることを保証してくれるものではない。小河川の増水をトリガーにして避難の判断をする行為は、実際には危険を伴うアプローチである場合も多いものと考えられる。もう一度、ここでハイライトしておく、グループ5の当初のメンバー13名は、小河川が増水する様子に目を奪われていて、あっという間に氾濫した川の流れによって、上流側と下流側に分断されたのであった。つまり、身のかわり方が遅れていたなら、誰かが水に押し流されていたとしてもおかしくはなかったということである。周辺の異変や予兆をキャッチする行為は、余裕をもってなされないかぎり、自ら危険を招き寄せることにもつながりかねない。

さらにいえば、現在の平榎集落は、2017年の豪雨によって小河川の水位確認ポイントを失ってしまっているわけである。したがって、当該地域における次の対策は、小河川が増水云々とは異なる観点から確立していく必要がある。

気象災害においては、ローカルな地点の異変をもとに早期避難を始める契機としようと呼びかける“避難スイッチ”の考え方が流布し始めている^{13,14)}。このような局所的な気象情報を平素から住民が主体的にモニターし活用することの意義は確かに大きい。特に住民の防災意識を喚起するうえで大変有効であると考えられる。しかし、危機

の切迫がスイッチのオン／オフのようにクリアカットに弁別できるとは限らない。さらに、平榎集落のように小河川が増水・氾濫し始めたかどうかを現地で視認しようとする行動－すなわち、避難スイッチの直前確認行動－は、想定外の増水が起きた場合、牛山 (2015) ⁷⁾ が指摘した死者発生ケースに直結することになる。平榎集落のグループ5が、実際に危機一髪に陥っていたことが、そのことを傍証している。

そこでやはり、“避難スイッチ”の提唱者たちが常に注意深く指摘してきているとおり、気象庁や行政から数日前に発出されるマクロな気象情報も、これまで以上に積極的に活用していくべきであろう。特別警報が出るかもしれないという見通し情報などをもってして、あたりが暗くなる前に、余裕をもって、より安全な場所に移動してしまう方略を取ることが、危機一髪事例を減少させることにつながるはずである。

このポイントを見誤らないようにするために、“避難スイッチ”に加えて、本研究では「余裕避難」のコンセプト^{15,16)}を提起しておきたい。要点は、以下のとおり4つある(図2)¹⁷⁾。

まず、気象情報の24時間程度の見通し情報をもとに、余裕をもって「立ち退き避難」、あるいは「分散避難」してしまうことである。ここまでは一般的な「早期避難」のコンセプトと同じである。早い段階であれば、避難先の選択肢も多くなる。2020年台風10号襲来時、鹿児島県の十島村民が自衛隊のヘリコプターで鹿児島市内にいち早く避難

していたケースなども参考になるだろう¹⁸⁾。

次に、余裕をもって避難先で留まり続けることである。日が暮れたので晩御飯を食べるために避難所から自宅に戻るといったことが、過去においても、そして現在でも繰り返されている(たとえば、近藤ら, 2010)¹⁹⁾。せっかく避難したのであるから、その場に留まろうとする心持ちをもっと後押ししていく必要がある。

3つ目に、警報が解除されたからといってすぐに警戒を解くことがないように、余裕をもって慎重に構えることである。2018年7月豪雨(西日本豪雨)の際、広島県府中町では、一級河川の榎川で豪雨による損壊箇所の復旧作業をしていたところ、土石流により寺山橋付近から氾濫し、本町地区・山田地区が浸水被害を受けた事例があった²⁰⁾。こうした“時間差”で襲ってくる危険があることも想定に入れておく必要がある。非日常が日常に戻る局面においても、まるでスイッチのようにオン／オフが切り替わるわけではないことを肝に銘じておかなければなるまい。

そして最後に4つ目として、情報の受容に関しても余裕をもって受け止めることである。やはり“空振り”に終わることは数多くある。しかしそのことを「無事(幸事)」だったと受け取めて、矢守²¹⁾が提唱しているような“素振り”だったと社会が思い合えるならば、次なる災害に向けて互いの耐性を高める機会を得たことをよりポジティブに(あるいはフラットに)位置づけることができるものと考えられる。

「余裕避難」のコンセプトは、避難行動指針を、総合的な観点からひとつのパッケージとして包括的に提唱するものである。上述した4つのポイントのうちどれかひとつの要点を欠いても、災害によって裏をかかれる隙を与えることになる。実際には難しい“避難トリガー探し”に躍起になって「避難所を目指す」ことだけに目を奪われていると、冒頭で示した牛山 (2015) ⁷⁾ のデータベースの知見が指摘していたとおり、「豪雨災害時には避難が最善の行動とは限らない」という命題に回帰していくことになるだろう。

気象災害が頻発する時代を迎えて、ハードウェ

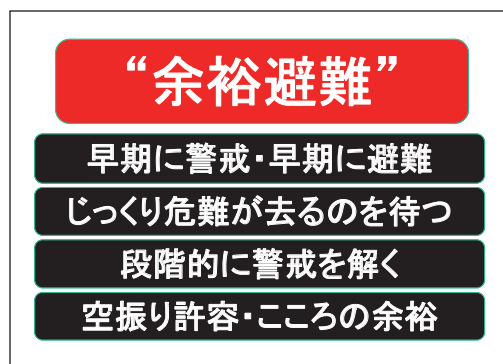


図2 余裕避難の要諦 (近藤, 2018) ¹⁷⁾

アの整備と併せて、社会の災害耐性（心の余裕／行動の余裕）のありかたを再構築していく具体的・説得的なアクションが、今後より一層求められるものと考ええる。

本研究では、一事例に関してのみ、調査・分析を行った。別様のサンプルと比較・検討するなどの立体的な視座に欠けているため、さらに他の災害事例を題材としてデータ収集を行うことが求められる。また、聞き取り調査に関しては、回顧的なナラティブの採取という手法の中に、調査者・協力者のステレオタイプな思い込みが混入してしまうリスクが潜んでいて、それらを排除することは原理的には極めて難しいと言わざるを得ない。この課題や制約を乗り越えていくためにも、縦断的・横断的な調査を積み重ねていく必要があるものと考ええる。

今後は、本研究が着眼した偶有性の介在という根本的な立脚点を、より精緻化したうえで、「余裕避難」の4つの要諦の必要十分性や相互規定性についてさらに検討を加えていきたい。

謝辞

本調査に際しては、福岡県朝倉市平榎集落の皆さまに多大なる協力を得ました。この場を借りて御礼申し上げます。また、この調査は、日本自然災害学会「災害調査補助」の助成を受けて実施しました。関係者の皆様に感謝申し上げます。

参考文献

- 1) 内閣府：「平成29年7月九州北部豪雨の被害状況と対応等について」、防災情報のページ みんなで減災、<http://www.bousai.go.jp/kohou/kouhoubousai/h29/88/disaster.html>, 2017. (2021年4月1日情報確認)
- 2) 総務省消防庁：「特集1 平成29年7月九州北部豪雨の被害と対応」、平成29年度版消防白書、<https://www.fdma.go.jp/publication/hakusho/h29/topics1/45858.html>, 2018. (2021年4月1日情報確認)
- 3) 福岡県：平成29年7月九州北部豪雨における災害対応に関する検証結果報告書（平成30年3月）、<https://www.bousai.pref.fukuoka.jp/spc/images/H29hokubugouu.pdf>, 2018. (2021年4月1日情報確認)
- 4) 矢守克也：「『自然と社会』を分ける災害情報－神戸市都賀川災害』、『巨大災害のリスク・コミュニケーション 災害情報の新しいかたち』、ミネルヴァ書房、pp.103-128, 2013.
- 5) 牛山素行：豪雨災害時の人的被害に関する研究、<http://www.disaster-i.net/research4.html>, 2018. (2021年4月1日情報確認)
- 6) 牛山素行：2004～2014年の豪雨災害による人的被害の原因分析、東北地域災害科学研究、No.51, pp.1-6, 2015.
- 7) 牛山素行：豪雨災害による人的被害、2015年度水工学に関する夏季研修会講義集Aコース、pp.A-2-1-A-2-19, 2015.
- 8) 矢守克也：「避難学」を構想するための7つの提言、災害情報、No.18-2, pp.181-186, 2020.
- 9) 矢守克也：防災心理学入門 豪雨・地震・津波に備える、ナカニシヤ出版、2021.
- 10) NHK：5年前の豪雨経験もとに住民が無事避難 朝倉／福岡、2017年7月17日放送.
- 11) 内閣府：TEAM 防災ジャパン 防災関連ニュース、<https://bosaijapan.jp/news/5%E5%B9%B4%E5%89%8D%E3%81%AE%E8%B1%AA%E9%9B%A8%E7%B5%8C%E9%A8%93%E3%82%82%E3%81%A8%E3%81%AB%E4%BD%8F%E6%B0%91%E3%81%8C%E7%84%A1%E4%BA%8B%E9%81%BF%E9%9B%A3%E6%9C%9D%E5%80%89%EF%BC%8F%E7%A6%8F%E5%B2%A1/>, (2021年4月1日情報確認)
- 12) 見田宗介：まなざしの地獄 尽きなく生きることの社会学、河出書房新社、2008.
- 13) 矢守克也・竹之内健介・加納靖之：避難のためのマイスイッチ・地域スイッチ、2017年九州北部豪雨調査報告書、京都大学防災研究所、pp.99-102, 2018.
- 14) NHK：NEWS WEB 災害列島 命を守る情報サイト「いつ逃げますか？ 地域で作る“避難スイッチ”」、2019.6.26. 放送、https://www3.nhk.or.jp/news/special/saigai/select-news/20190626_01.html, (2020年4月1日情報確認)
- 15) 近藤誠司：「豪雨災害 確実に避難するために」、NHK マイあさラジオ（私の見方・私の視点）、2018.8.18. 放送.
- 16) 近藤誠司：「余裕避難 4つの要諦」、FM あまがさき（防災アイアイ）、2018.11.1. 放送.
- 17) 近藤誠司：平成29年7月九州北部豪雨における“全員無事集落”の避難行動～福岡県朝倉市平榎

- 地区住民の初動実態調査～，自然災害学会第37回学術講演会，発表スライド，2018.
- 18) 朝日新聞デジタル：鹿児島島の島民，いざ帰島台風10号から自衛隊機で避難，2020.9.9. <https://www.asahi.com/articles/ASN9941TPN98TLTB015.html>, (2021年4月1日情報確認)
 - 19) 近藤誠司・矢守克也・奥村与志弘：「メディア・イベントとしての2010年チリ地震津波～NHK テレビの災害報道を題材にした一考察～」，災害情報，No.9，pp.60-71，2011.
 - 20) 府中町：平成30年7月豪雨災害による被災状況など，<https://www.town.fuchu.hiroshima.jp/site/kikikannrika/13011.html>, (2021年4月1日情報確認)
 - 21) 矢守克也：巻頭言，地区防災計画学会誌第13号，p.1，2018.
- (投稿受理：2021年4月4日
訂正稿受理：2021年7月5日)

要 旨

これまで，水害の避難行動に関する実証的な調査においては，死者の発生原因に着目して，自然要因・社会要因の課題を抽出する分析アプローチが多かった。しかし，九死に一生を得たような，失敗事例のグレイゾーンに該当する経験からも教訓を得ておくことが肝要である。そこで本研究では，2017年九州北部豪雨で危機に見舞われながらも全員が助かった福岡県朝倉市平榎集落の住民の避難行動のありかたを分析することにした。縦断的なインタビュー調査を実施した結果，集落の在住者85名中，約50名の当日の行動を捕捉することができ，その行動パターンが5種類に分類できることがわかった。このうち，常に安全な状況にあったと判定できたのは，たまたま集落の外に居た人たちだけであり，それ以外のほとんどすべての人たちが命に関わる危難に見舞われていたことがわかった。このような知見をふまえて，避難行動パッケージに対する実践的な提言－「余裕避難」の提起－を行った。